

裸の島

—— 映画文学人生論

監督：新藤兼人 (1960年)

出演：千太 (夫) : 殿山泰司

トヨ (妻) : 乙羽信子

太郎 (長男) : 田中信二

次郎 (次男) : 堀本正紀

参考：新藤兼人『シナリオの構成』(雷鳥社)

脚本：新藤兼人

撮影：黒田清巳

音楽：林光

このシナリオにはセリフは一言もない

『裸の島』は、五百万円の低予算で製作されたという。新藤兼人、乙羽信子、殿山泰司などが所属する「近代映画協会」が経営危機におちいり、解散する前の記念につくった映画だ。

ところが、映画は何がヒットするか、つくってみないとわからない。一九六一年にモスクワ国際映画祭グランプリを始め、数々の国際映画祭で受賞し、興行的にも成功をおさめたので、近代映画協会は息を吹き返した。

監督・脚本の新藤兼人によれば、「このシナリオにはセリフは一言もない。始めから終わりまで画面の構成で成り立っている。しかしサイレント映画ではない。音はある。波の音。風の音。笑う声、ため息、生きている自然と人間はそのままシナリオの中に生きている」。

そんな映画が面白いだろうか。私の経験をいえば、正直なところ、最初はやや退屈した。やはりセリフがないと物足りない。ただし、映画を観終わったあとに余情が残っている。

二度目に観たときは、すこし感動した。土の匂い。草の匂い、潮の香り——それに、なによりもここには生活がある、これこそ生活だと思った。

殿山泰司と乙羽信子の夫婦と男の子二人の家族が電気、ガス、水道がない島(広島県の宿彌島)で暮らしている。夫婦は小さな伝馬船の櫓をこいでいる。岸に着くと、天秤棒で肥桶をかつぎ、急



裸の島

映画文学人生論

な坂道を登り、水を汲みに行く。

ぷつんと綱が切れ、妻が倒れる。肥桶の水が乾いた土の上におちまけられた。夫がやってきて、いきなり妻を殴る。

二人の男の子は釣竿で大きな鯛を釣り上げる。夫婦と子どもたちはその鯛を町へ売りに行く。なんとか売れたので、子どもたちは食堂で卵丼を食べさせてもらう。親子四人、貧しいながらも幸せそうな生活がある。

その家族に突然、不幸が襲った。長男が重い病気にかかり、あっけなく死んでしまった。伝馬船で医者を迎えに行ったが、間に合わない。母は号泣し、父は黙って母の哀しみをみつめるしかなかった。辺鄙な島で暮らす家族の悲劇だ。

だが、これは太古から繰り返されてきたことではないだろうか。人間は悲劇を乗り越えて、生存し、繁殖し続けてきた。最近では電気、ガス、水道など文明の利器のおかげで、生活は便利になり、医学の進歩のおかげで寿命は伸びている。

人間は生活が便利になると、ほんとうの生活がどんなものか忘れてしまう。そのことを思い出させてくれる映画だ。

また、人間の生活にセリフが必要かという問題についても考えさせられる。実はほとんどがムダなおしゃべりで、必要ないのかもしれない。

太古から裸の島よ蝉の声